

2018

NO.38

MEIJO UNIVERSITY NEWS

名城大学 総合研究所

Dynamic-Interface

人・環境・未来に貢献する学術プロジェクト



Message



総合研究所 所長
平松美根男

総合研究所 NEWS(第38号)の発刊にあたって

名城大学総合研究所は、名城大学の専任教育職員(以降「専任教員」と記載)相互または学外の研究者との共同研究を推進し、もって学術文化の進歩発展に寄与するために1994年4月1日に設置されました。以降、①研究および調査、②研究・調査の成果に関する広報、③研究会、交流会および各種講座等の開催、④学術研究奨励助成制度に関する事項、⑤その他目的達成に必要な事業、を取り扱い、現在260名を超える所員とともに研究事業を展開しています。

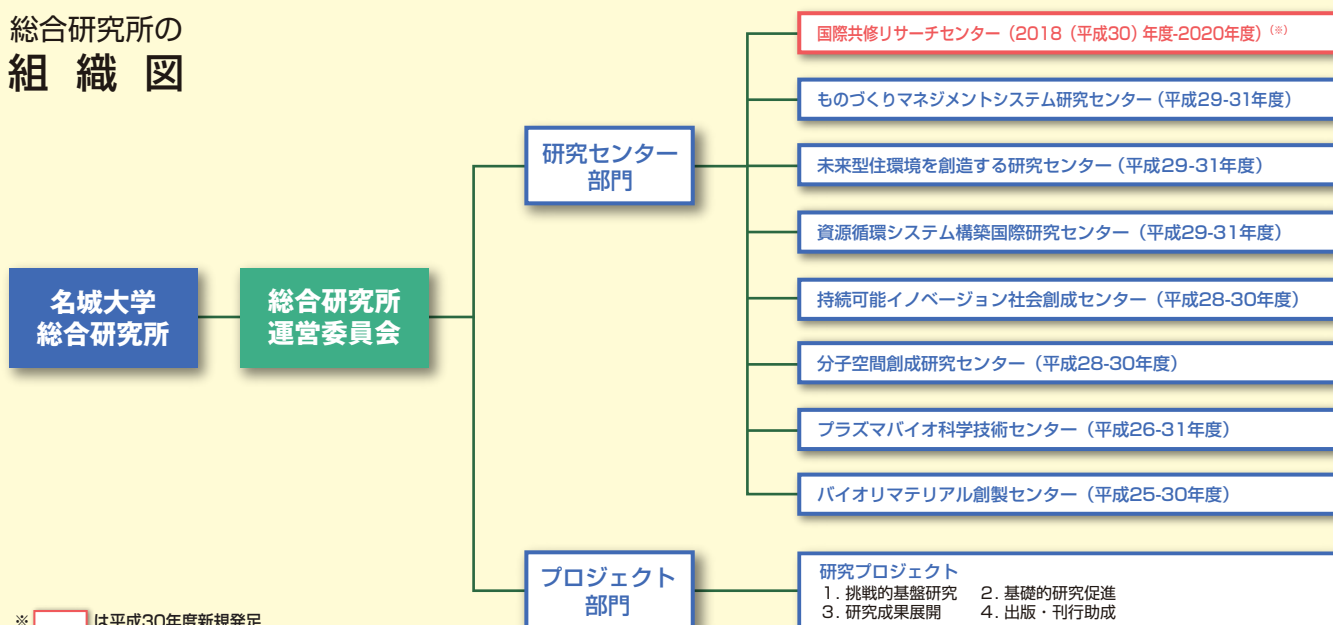
まず、広報活動の一環として、当NEWSの発刊を行っております。総合研究所の行事や活動、研究センターや所員の研究紹介等を掲載し、活動の情報発信を行っています。また、紀要および論文集を発刊し、所員の研究・調査の成果を広く世に広めております。

さらに、研究成果を広く社会に還元するため、公開講演会を開催しています。今年度は、昨年度に引き続き、東京オリンピックに向けて「健康・スポーツ」をテーマに開催しております。前期は、本学女子駅伝部・米田勝朗監督(法学部教授)にご講演いただき、2017年10月に果たした全日本大学女子駅伝における二度目の優勝にたどり着くまでの指導方法等について、長年の指導を通じた経験を踏まえてお話しいただきました。

さらに、総合研究所では、所員に対し学術研究奨励助成制度を設けています。総合大学の特色を活かし、文系・理系の分野を問わず学際的共同研究や高度な学術研究を推進するために、全学的な立場からプロジェクト部門と研究センター部門からなる時限的研究を支援するもので、名城大学における研究活動の活性化に寄与しております。専任教員は、研究課題を申請することで所員になることができますので、学術研究活動の更なる発展や国際連携・研究拠点形成の実現に向けて、この総合研究所を上手く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、当NEWSの発刊にご協力いただいた全ての方に感謝を伝えるとともに、今後の名城大学総合研究所の発展に益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

総合研究所の 組織図



平成30年度 総合研究所 REPORT

平成30年

6月30日 ● 公開講演会を開催 健康・スポーツシリーズ第3回

テーマ『管理指導と自主性重視の指導～女子駅伝部の指導から学んだこと～』

講演者：米田 勝朗(法学部 教授/女子駅伝部 監督)

行事計画

11月14日 ● 研究センター(2年目)による中間報告会を開催

ものづくりマネジメントシステム研究センター 研究代表者：田中 武憲(経営学部 教授)

未来型住環境を創造する研究センター 研究代表者：垣 鐸 直(理工学部 教授)

資源循環システム構築国際研究センター 研究代表者：田中 義人(理工学部 教授)

11月24日 ● 公開講演会を開催 健康・スポーツシリーズ第4回

テーマ『「もぐもぐタイム」からみる日本人の所作・思考』 講演者：富岡 徹(外国語学部 教授)

総合研究所

総合研究所が「健康・スポーツシリーズ」第3回公開講演会を開催

総合研究所は6月30日、天白キャンパス共通講義棟南S301教室で「健康・スポーツ」シリーズの公開講演会を「管理指導と自主性重視の指導」をテーマに開催し、地域の方々や学生、教職員ら約110名が参加しました。

第3回となる今回は、昨年全日本大学女子駅伝で2度目の全国制覇を成し遂げた名城大学女子駅伝部の監督である米田勝朗法学部教授が、講演を行いました。

米田監督は、長年の指導から得た経験を踏まえて、「管理指導」と「自主性重視の指導」について、大きく異なる方法の中で得た勝利のプロセスに係る指導方法を紹介しました。

質疑応答の際には「高校駅伝と大学駅伝の違いは？」「長距離選手に適した身体とは？」といった熱心な質問が飛び交いました。

また、参加者からは、「とても胸が熱くなる講演会だった」「自主性の重要性を知れた」など好評の声が多く、盛況となりました。

次回も「健康・スポーツ」をテーマに、11月開催予定です。ぜひご参加ください。



名城大学総合研究所 公開講演会

健康・スポーツシリーズ 第4回

「もぐもぐタイム」からみる
日本人の所作・思考

平昌オリンピックで日本女子カーリングチームが休憩時間に車座になってしゃがみ、イチゴなどを食べる姿が「もぐもぐタイム」と言われ注目されました。あのようなくさは、非常に日本的です。このことをきっかけに、日本人の日常動作や所作の特徴を考えていきたいと思っています。実は、歩き方や立ち姿、数の数え方まで、日常動作・所作は国民の民族性、疾患傾向にまで繋がっています。日本人の生活環境の特徴を把握し、健康的な生活につながる新たな視座を提供したいと思っています。

入場無料 定員 200名 要事前申込

平成30年 11/24(土) 13:30▶15:00

プログラム
13:30 ●開会挨拶
13:35 ●講演
14:40 ●質疑応答
14:55 ●閉会挨拶

講師
名城大学 外国語学部 富岡 徹 教授

会場
名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス 南館3階 DS305教室
〒461-8534 名古屋市中区矢田南4丁目102番9
※会場には駐車場がありません。公共交通機関をご利用ください。

参加申込 WEB、FAX、ハガキでお申し込みください。
WEB https://f.msgs.jp/webapp/form/19002_wccb_25/index.do
FAX 052-833-7200
ハガキ 〒468-8502 名古屋市中区塩釜口1-501 名城大学総合研究所 宛
※FAXハガキの代表者氏名・年齢・職業・性別・所属・参加希望氏名（複数人の場合は全員の氏名・年齢を記載）・申し込み理由・申込理由を明記し、同封の返信用封筒に貼付してください。申し込みが多数で参加できない場合はご連絡いたします。

申し込み締切 11月21日(水) 正午

お問い合わせ先：名城大学総合研究所 名古屋市中区塩釜口1-501 TEL:052-838-2034

平成30年度総合研究所 中間報告会

今年度、設立2年を迎える研究センターが、現在の進捗状況や最終年度に向けた展望を報告します。是非ともご参加ください。

日時：平成30年11月14日(水) 15:30～17:40
場所：タワー75 15階 レセプションホール
講演内容：15:40～16:10

「愛知の産業分水嶺—愛知のもののづくりの課題と展望—」
自動車をはじめ、長年、日本の製造業を支えてきた愛知のもののづくりですが、電動化・知能化・情報化やシェアリングエコノミーなど「100年に一度」と言われる自動車産業のパラダイムシフトが進む現在、企業にはさらなるものづくり経営の深化と革新が求められています。本報告では、現在の愛知のもののづくり企業が直面する経営課題を明らかにし、その解決策や将来展望の一端をお示しします。

ものづくりマネジメントシステム研究センター
代表 経営学部 田中 武憲 教授

16:20～16:50
「塩耐性植物の物質生産の制御機構および海藻養殖に影響を与える環境要因の解明」
植物の耐塩性のしくみを明らかにするため、塩耐性植物であるシュガービート(Beta vulgaris)を材料にして、浸透圧適合溶質であるグリシンベタインの合成経路の複数の酵素について、酵素活性および遺伝子発現について調べました。また、内湾における海藻養殖に対して悪影響を与える海水の濁りについて観測を行い、濁り発生のメカニズムを明らかにし、内湾の海水の濁りをシミュレートできるモデルの構築を試みました。これらの研究で得られた結果について報告します。

資源循環システム構築国際研究センター
代表 理工学部 田中 義人 教授

17:00～17:30
「省エネ時代における健康・快適を生む住環境の実現を目指して」
温暖化が深刻化する中、建物の省エネルギー化はますます加速しています。一方、誤った節約志向の住環境設計は、居住者のストレスを増し、場合によっては健康被害をもたらすことが知られています。従って、将来の住環境は、エネルギー消費を削減すると共に快適かつ健康を保障する技術開発が重要です。以上のことに注目して進めてきた研究の進捗状況を報告します。

未来型住環境を創造する研究センター
代表 理工学部 垣内 直 教授

名城大学総合研究所 公開講演会
健康・スポーツシリーズ 第3回

平成30年 6/30(土) 13:30 15:00

管理指導と
自主性重視の指導
～女子駅伝部の指導から学んだこと～

入場無料 定員 300名 要事前申込

名城大学
天白キャンパス 共通講義棟南 S301
〒468-8502 名古屋市中区塩釜口1丁目501番9
※会場には駐車場がありません。公共交通機関をご利用ください。

2005年、創部11年目に臨んだ初めての全国制覇。そこから12年後、2017年に臨んだ2度目の全国制覇。同じ全国制覇でも、その価値は大きく異なります。
「指導者が「勝たせる」優勝から「選手自身が「勝ちに行く」優勝へ—管理指導と「自主性重視の指導」の双方を实践し、大きく異なる方法の中で得た勝利のプロセスに係る指導方法を長年の名城大学女子駅伝部の指導から得た経験を踏まえて、お話しします。

講師
名城大学 法学部教授 女子駅伝部監督 米田 勝朗

プログラム
13:30～13:40 開 会 挨拶
13:40～14:40 講 演
14:40～14:55 質 疑 応 答
14:55～15:00 閉 会 挨拶

参加申込 https://f.msgs.jp/webapp/form/19002_wccb_22/index.do
参加申込みはこちらをご覧ください。
申し込み締切 6月27日(水) 正午
申し込みは定員に達し次第締め切らせていただきます。申し込みが多数で参加できない場合はご連絡いたします。

お問い合わせ先：名城大学総合研究所 名古屋市中区塩釜口1-501 TEL:052-838-2034

平成30年度 名城大学総合研究所

「学術研究奨励助成制度」の採択者、研究課題決定

平成30年度の「学術研究奨励助成制度」の採択者、研究課題が学内の「学術研究審議委員会」において「独創性・新規性・妥当性・社会性・計画性・実施体制」等総合的な判断により決定されました。

1. 挑戦的基盤研究事業費

内容 本学専任教員が、科研費をはじめ学外の研究助成(学外競争的資金)獲得のための準備段階の研究で、個人の研究を対象に助成する。

助成額 500千円以内/件(20件以内/10,000千円を限度)

2. 基礎的研究促進事業費

内容 本学専任教員が、募集対象の前年度(平成29年度)に、科研費に研究代表者として、より発展をめざす研究計画で申請を行ったが、採択に至らなかったものの審査結果が「A(上位20%)」又は「B(上位20%~50%)」を対象に助成する。(研究分担者を伴うグループ研究を含む)

助成額 700千円以内/件(10件以内/7,000千円を限度)

3. 研究成果展開事業費

内容 本学専任教員が、募集対象の前年度(平成29年度)に、科研費(継続を含む)又は学外競争的資金(年額100万円以上)に研究代表者として採択された評価の高い研究で今後いっそう飛躍が期待できるものを対象に助成する。(研究分担者を伴うグループ研究を含む)ただし、科研費等の採択課題毎に1回の助成とする。

助成額 500千円以内/件(15,000千円を限度)

4. 出版・刊行助成事業費

内容 学術的に価値が高い研究成果で、通常の出版が困難である本学専任教員の単著又は共著(本学専任教員のみ)で刊行予定のものであり、本大学に蓄積された、豊かな学術活動の成果を社会に公開するための学術書・教科書・啓蒙書等の出版・刊行を対象に助成する。

助成額 1,500千円以内/件(2件以内/3,000千円を限度)

5. 研究センター推進事業費

内容 本学専任教員の複数名からなる研究グループの行う、①最先端レベルの研究プロジェクト、②学際的な共同研究事業、③研究分野に優れた業績のある教員との共同研究事業について、学内審査により研究拠点(研究センター)として承認されたプロジェクトを対象に、最長3年間助成する。

助成額 (平成30年度)7,000千円程度/2件以内
2年目以降は、前年度の8割を限度とする。

◆「挑戦的基盤研究事業費」採択者一覧◆

番号	学 部	職 名	代表者氏名	研 究 課 題	金額(千円)
1	経 済 学 部	教授	佐土井有里	ミャンマーにおける中小企業の人材育成調査	500
2	理 工 学 部	准教授	菅 章紀	陽イオン欠陥導入によるスピネル系誘導電体材料の高Q化とその結晶構造解析	500
3	理 工 学 部	准教授	田中 正剛	水素二層分離を生じる自己組織化構造体の分離構造材料としての展開	500
4	理 工 学 部	教授	中條 渉	ローリングシャッターを用いたイメージセンサ可視光通信の高速同期	500
5	理 工 学 部	教授	宮嶋 孝夫	バイオイメージング用小型光源を目指したGaAs系超短パルス半導体レーザ	500
6	農 学 部	教授	磯井 俊行	自然栽培における窒素獲得に及ぼす生物窒素固定および微生物バイオマス窒素の影響	500
7	農 学 部	教授	氏田 稔	ヒト酸化LDL受容体を標的とした新規動脈硬化予防物質の開発	500
8	農 学 部	准教授	近藤 歩	葉緑体のドーナツ化現象-葉緑体のオートファゴソーム機能を探る-	500
9	農 学 部	助教	長澤 麻央	食品科学を基礎としたストレス予防研究を進める上で重要な慢性ストレスモデルの確立	500
10	農 学 部	准教授	林 義明	採卵鶏の健康増進と鶏卵の高付加価値化を目指すシイタケ廃菌床飼料の評価	500
11	薬 学 部	准教授	奥田 知将	自己組織化ナノ粒子型吸入粉末剤の実用化を指向した基盤研究	500
12	薬 学 部	教授	小田 彰史	タンパク質中アミノ酸残基の非酵素的なラセミ化についての計算化学的研究	500
13	薬 学 部	助教	近藤 啓太	汎用混合機を用いた乾式錠剤コーティング法の確立	500
14	薬 学 部	准教授	高谷 芳明	イチゴの抗血栓作用のqNMRによる予測	500
15	薬 学 部	助教	西川 泰弘	テンプレート効果を利用するアミド近傍ヒドロキシ基選択的アシル化反応の開発	500
16	薬 学 部	助教	日坂 真輔	脂質過酸化修飾タンパク質の毒性を制御する生薬成分の探索	500
17	薬 学 部	助教	水野 智博	iPS細胞より分化誘導したエリスロポエチン(EPO)産生細胞より分泌されるEPO糖鎖解析研究	500
18	薬 学 部	教授	森 裕二	海洋産ポリ環状エーテル・ギムノシン-Bの全合成研究	500
19	薬 学 部	教授	湯川 和典	PlexinA1受容体欠損マウスにおける統合失調症様行動の病態メカニズム解明	500
20	人 間 学 部	准教授	西村 善矢	中世初期イタリア南部における社会・経済構造と史料構造の関係をめぐる基礎研究	500
計					10,000

◆「基礎的研究促進事業費」 採択者一覧 ◆

番号	学 部	職 名	代表者氏名	研 究 課 題	金額(千円)
1	理 工 学 部	教授	成塚 重弥	「ナノスクリーグラフェン」の特性および成長メカニズムの解明	700
2	農 学 部	准教授	奥村 裕紀	鳥類卵膜構成糖タンパク質の翻訳後修飾とその生理的意義の解明	700
3	農 学 部	助教	志水 元亨	生きた麹菌の摂取が腸内の細菌叢および代謝物に及ぼす影響について	700
4	農 学 部	教授	津呂 正人	siRNA誘導型モノテルペン合成酵素遺伝子は他のモノテルペン合成酵素遺伝子も発現抑制するのか	700
5	農 学 部	教授	林 利哉	レトルト加熱による筋原線維タンパク質の変性・分解挙動と生理機能の発現	700
6	農 学 部	教授	松儀 真人	フルオラスースタッキングに依拠した不斉反応場空間の創成と利用	700
7	農 学 部	准教授	村野 宏達	有機物を多量に施用した土壌の地力評価を目的とした可給態窒素含量推定法の開発	700
8	薬 学 部	助教	岡本 啓士典	アストロサイトのメタボロームプロファイルに及ぼす影響解析	700
9	薬 学 部	教授	亀井 浩行	薬剤師の統合失調症患者へのスティグマを是正するための評価尺度の開発	700
10	薬 学 部	教授	永松 正	凝集糖化タンパク質で糸状体細胞のミトコンドリアに異常が生じるのか？	700
					計 7,000

◆「研究成果展開事業費」 採択者一覧 ◆

番号	学 部	職 名	代表者氏名	研 究 課 題	金額(千円)
1	理 工 学 部	准教授	景山 伯春	シアノバクテリアを用いた有用物質生産基盤の開発	500
2	理 工 学 部	教授	寺西 浩司	振動締結めが構造体コンクリートの材料分離度合いに及ぼす影響に関する研究	500
3	理 工 学 部	教授	丸山 隆浩	単層カーボンナノチューブ作製用触媒の酸化物担持材の開拓	500
4	農 学 部	教授	大浦 健	Orbitrap GC/MSによる環境・生体物質解析基盤の構築	500
5	農 学 部	教授	寺田 理枝	迅速遺伝子編集法の確立と遺伝子編集イネの機能解析	500
6	農 学 部	准教授	濱本 博三	多肉植物繊維を活用する固相触媒酸化反応系の開発	500
7	農 学 部	教授	日野 輝明	水稻害虫に対する育苗箱処理殺虫剤の効果とカエルによる天敵効果の比較	500
8	薬 学 部	教授	北垣 伸治	キラルホスフィン触媒を用いるMBH付加体の不斉分子変換	500
9	薬 学 部	准教授	坂井 健男	三連続反応による骨格一挙構築法を用いたStemonamineおよびCephalotaxinの全合成研究	500
10	薬 学 部	教授	神野 透人	気道障害性環境化学物質に対する感受性の個体差に関する研究	500
11	薬 学 部	教授	丹羽 敏幸	製薬産業での実用化へ向けたコンタミレス超低温粉碎技術の発展	500
12	薬 学 部	教授	能勢 充彦	牛車腎気丸の糖尿病性末梢神経障害予防作用とその作用機序の解析	500
13	薬 学 部	助教	吉田 圭佑	触媒的スピロインダン骨格構築を利用する生物活性天然物プロアポルフィンアルカロイド類の全合成	500
14	薬 学 部	助教	吉見 陽	プロテオミクス技術によるクロザピン関連分子の同定	500
15	都市情報学部	教授	若林 拓	自然災害による孤立集落発生防止のための道路網強靱化戦略とその実用的近似解法の開発	500
					計 7,500

◆「出版・刊行助成事業費」 採択者一覧 ◆

番号	学 部	職 名	代表者氏名	研 究 課 題	金額(千円)
1	教職センター	准教授	嶋口 裕基	ブルーナーの「文化心理学」と教育論	1,500
					計 1,500

◆「研究センター推進事業費」【新規】 採択者一覧 ◆

番号	研究代表者			研 究 セ ン タ ー 名	金額(千円)
1	外国語学部	教授	西尾 由里	国際共修リサーチセンター	6,820
					計 6,820

◆「研究センター推進事業費」【継続2年目】 採択者一覧 ◆

番号	研究代表者			研 究 セ ン タ ー 名	金額(千円)
1	経 営 学 部	教授	田中 武憲	ものづくりマネジメントシステム研究センター	2,800
2	理 工 学 部	教授	垣 鍔 直	未来型住環境を創造する研究センター	2,800
3	理 工 学 部	教授	田中 義人	資源循環システム構築国際研究センター	5,600
計					11,200

◆「研究センター推進事業費」【継続3年目】 採択者一覧 ◆

番号	研究代表者			研 究 セ ン タ ー 名	金額(千円)
1	農 学 部	教授	大場 正春	持続可能イノベーション社会創成センター	4,480
2	薬 学 部	教授	北垣 伸治	分子空間創成研究センター	4,480
計					8,960

総合計					52,980
-----	--	--	--	--	--------

平成30年度 名城大学総合研究所 学術研究奨励助成制度 採択研究紹介

研究センター部門



国際共修リサーチセンター

The Research Center for International Cooperative Learning

研究代表者 外国語学部 教授 西尾 由里

- 平成30年度 研究センター発足
- 平成30年度 学術研究奨励助成制度
研究センター推進事業費採択

国際共修リサーチセンターの目的は、学生が参加する Semester 留学及び短期海外研修等の効果について、現地での多様な学習者との国際共修という観点から、実際どのような学びがあるのかを言語的な上達と異文化感受性の変化に着目し、科学的に実証することを目的としています。さらに、名城大学が現在推進している多様な留学生の受け入れ増の取り組みに対応して、本学で実践される国際共修の成果についても科学的な実証研究を目指すものです。

国際共修とは、「言語や文化の異なる学生同士が、授業内で意味ある交流 (Meaningful Interaction) を通して相互理解を深めながら、他者を理解し、己を見つめなおし、新しい価値観を創造する学習体験のことである」(東北大学高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンター)と定義されます。まずは、名城大学の学生が海外で学ぶ前後、その留学後のキャリア選択に至る継続的な変遷を調べます。その研究と同様に、海外からの留学生が名城大学でどのように共修が行われているかも検証します。そのデータを広く公開、共有し、中部圏の他大学へとの研究を広げ、中部圏の国際共修リサーチセンターの拠点となることを目指しています。

現在、世界経済のグローバル化に伴い、国際的に活躍できる人材の育成が急務とされ、その動きから、留学が大きくクローズアップされています。文部科学省は、平成25年より、官民協働の留学促進キャンペーン「トビタテ！留学JAPAN」を企業の寄付により運営し、年間約1500名の高校生と大学生に返済不要の留学奨学金を給付して、留学を後押ししています。独立行政法人日本学生支援機構が実施している「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」によると、日本人学生の海外留学状況は、平成27年度(2015年度)で、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアなどの英語圏への留学が、84,456人(対前年度比3,237人増)となっています。一方、毎年、国内の高等教育機関等における外国人留学生(在留資格「留学」で滞在している外国人学生)の平成28年度5月1日時点の在籍状況調査によると、外国人留学生は239,287人(対前年比30,908人(15%)増)であり、中国、ベトナム、ネパールなどアジアからの留学生が多く日本に留学していることがわかります。以上のように、海外に留学する日本人が、特に欧米の学生と共に学習(共修)し、またアジア圏からの留学生が日本の大学等に在籍し共修するという学習環境が特別なものではなくってきています。

また、名城大学では、「国際化計画2013」を掲げ、学生には「国際専門研修」として「海外派遣研修プログラム」、「国際共同研修プログラム」、「海外講師セミナー」や「海外英語研修」など、短期、長期にわたる留学からインターンシップまで、様々な期間、様々な形態で学習できる機会を豊富に提供して

います。2016年度には、開学90周年記念事業の一環として、外国語学部が設立され、Semester 留学や長期留学、海外でのフィールドワークなど多様なプログラムを実施しています。さらに、名城大学では、海外からの留学生を受け入れ、日本語クラスの設置、英語での日本文化、経済など多様な授業を提供し、大学の国際化を進めています。現在、2018年度後期Semesterより、アメリカ、オーストラリアからの留学生がこのプログラムにより名城大学で学んでいます。留学生は、日本語習得及び日本という異文化に対応しながら、日本人学生からも学び、また、日本人学生にとっても、留学生と共に学ぶ過程で、言語及び、異文化接触により、多くの学びがあると推測されます。

留学経験の効果については、先行研究から異文化感受性 (Anderson & Lawton, 2011)、異文化間コミュニケーション力 (Pederson, 2010)、言語スキルの上達 (Segalowitz, et al., 2004)、態度変容 (Hadis, 2005) など、学生に多様な学びと変化をもたらすことが明らかとなっています。日本国内でも、人間の成長の面での変化が指摘されており (足立, 2010)、3週間の短期留学プログラムでも、英語力や学習へのモチベーションが上がったと報告されています (Harris, 2015)。以上の先行研究をまとめると、留学の効果としては、コミュニケーションを含む言語能力と異文化接触による変容が挙げられます。

しかしながら、留学という海外での学生や様々な人たちとの国際共修によって何を学び、さらに留学後、その経験が、どのように大学の学び及び人間性に影響を与え、さらには就職に反映しているかといった国際共修の学びを4年間の学びの中で位置づけた実証的な研究は多くありません。さらに、留学生が日本の大学で日本の学生と共修することにより、留学生も日本人学生も言語や異文化などにおいて、どのように何を学んで、それが、将来のキャリア形成に影響を与えているかという包括的な研究も見られません。そこで、当センターでは、世界標準の外国語能力尺度 (CEFR) 及び異文化感受性尺度 (IDI) に基づく量的調査と留学体験口述の質的調査との混合研究方法を用いて、留学体験を4年間の学びの一環として捉え、言語能力や異文化能力が大学での学びやキャリア形成においてどのように影響を受けるかについて、名城大学国際共修モデルを提案したいと考えています。

現在、外国語学部のSemester 留学の学生たちの協力を得て、調査を行った結果、留学前後において、英語能力の大きな伸びが明らかにされ、さらには、異文化感受性においても大きな変遷が見られます。今後、これらの変化が、時間の経過と共にどのように変化し、さらにはキャリア形成にどのような影響があるのかを検証していく予定です。

名城大学 総合研究所

平成30年度 学術研究奨励助成制度 研究センター推進事業費採択

国際共修リサーチセンター

The Research Center for International Cooperative Learning

外国語学部 教授 西尾由里

国際共修という視点から、外国語能力尺度 (CEFR) 及び異文化感受性尺度 (IDI) に基づく質的・量的研究から、留学の教育効果を明らかにし、中部圏の国際共修リサーチセンターの拠点となる。



組 織

センター代表者：西尾 由里 (外国語学部)
研究分担者：二神 真美・宮崎 新 (外国語学部)



名城大学

「紀要」と「総合学術研究論文集」の発行

紀 要 第23号 目次

◆研究報告

- 移民統合政策指数にみる日本の多文化共生政策の課題と展望
近藤 敦
- 年齢規範の変容と労働政策
柳澤 武
- リマン(再製造)によるミャンマーでの人材育成
佐土井有里
- 自動車用AR(Augmented Reality)表示装置における心的拡大・縮小(Mental Expansion)と視覚探索
岡林 繁, 豊田 怜平, 長谷川浩之, 笠置 剛
- 幸福論としての社会福祉論について
—現象学的経済学の構築に向けて—
鎌田 繁則
- 労働の喜びと余暇からの不安について
—現象学的経済学の視点から過労死問題へのアプローチ—
鎌田 繁則
- 細胞に対する大気圧プラズマの照射効果とその反応メカニズムの解明
太田 貴之
- 受信シンボルの周期パターンによるイメージセンサ可視光通信のシンボル同期
中條 渉
- マルテンサイト相を有する生体用 $\alpha + \beta$ 型Ti—6Al—7Nb合金の力学的特性
井野 翔太, 赤堀 俊和, 新家 光雄
- 溶体化処理を施した歯科用セミプレシヤス合金のミクロ組織と機械的強度の関係
赤堀 俊和, 新家 光雄, 福井 壽男
- GaN量子井戸を用いた黄緑色発光ダイオードの作製
吉永 純也, 市川 竜弥, 竹内 哲也, 岩谷 素顕, 上山 智, 赤崎 勇
- 減圧窒素マイクロプラズマ処理における処理圧力とプラズマ到達距離との関係
杉山 隼大, 目下部安宏, 竹中 駿, 上田 悠貴
山田 純平, 丸山 隆浩, 成塚 重弥
- Cu担持酸化チタン光触媒の親水性に与える光の波長の影響
清水 建伍, 柴山美沙都, 玉川 尚輝, 大脇 健史
- Graphene Oxideナノシートからなる球状構造体の触媒担体への応用
—Pt ナノ粒子の担持と酸素還元活性の評価—
榊原 鑑, 才田 隆広
- 酸素還元反応に対する結晶性RuO₂における活性サイトの検討
—粒子径と結晶構造が与える影響—
平野 晶子, 佐藤 史彬, 才田 隆広
- 末端の化学反応にともなった自己組織化ペプチドの高次構造化
田中 正剛, 立松 由詩, 細川 芽依
- 誘起適合型比色不斉分子認識系の構築に向けて
山口 輝倫, 坂 優太, 松永 法子, 藤田 典史
- ドナー・アクセプター相互作用を利用した精密比色分子認識系の構築に向けて
神谷 幸佑, 梶山 真矢, 岡部 将也, 藤田 典史
- Co触媒からの単層カーボンナノチューブの低温成長
—Al₂O₃バッファ層を用いた生成量増加の試み—
岡田 拓也, 才田 隆広, 成塚 重弥, 丸山 隆浩
- Experimental study of Clarification of Vortex Structure by Changing Disk Acceleration Time
Hiroyuki FURUKAWA, Akihiro WADA and Takashi WATANABE
- Experimental investigation on ductile fracture of structural steel under low stress triaxiality
Hanbin GE

ゲリラ豪雨に伴う都市河川の急激な出水事例と降雨情報を含めた河川管理のあり方

原田 守博, 桑下 大地, 鷺見 哲也
都市河川の流出特性に対応した洪水観測システムと水位流量曲線作成の試み

原田 守博, 植村陽一郎, 打田 佳紀
コンクリート塊の資源循環システムに関する研究
—混和材によるコンクリート塊からのセシウムの溶出抑制—

道正 泰弘
大腸菌細胞を用いた効率的なマイコスポリン様アミノ酸生産条件の検討
景山 伯春
Mycosporine—2—glycine の特性:DNA 損傷に対する保護機能およびフリーラジカル消去機能

景山 伯春
合成生物学的手法によるエチレン生成スーパーシアノバクテリアの構築
—Ethyleneomeの改良によるエチレン高生産—

神藤 定生
反跳粒子検出法による正負極/固体電解質界面の充電時における過渡的リチウム濃度その場測定

土屋 文
ドイツにおける景観保全に対する意識
—リューネブルガーハイデを事例として—

平見慎太郎
超多収イネ品種の莖葉部において機能するデンプン分解関連酵素遺伝子の同定
—デンプン代謝関連酵素遺伝子の発現解析と機能解析に向けた形質転換体の作出—

平野 達也, 杉村 優有, 西脇 利恵
糸状菌における鉄恒常性のマスターレギュレータHapB/C/E/X複合体の相互作用タンパク質の解析

辻上 誠也, 村田 俊輔, 山下 美春, 志水 元亨, 加藤 雅士
新規MOAレダクターゼA(MorA)を高発現させた麹菌を用いて製造した清酒の成分分析

栗本 真希, 酒井 杏匠, 山本 竜也, 志水 元亨, 加藤 雅士
麹菌 *Aspergillus oryzae* 由来の新規GH family 134に属するAoMan134Aの酵素学的性質

酒井 杏匠, 新沢 祐太, 加藤 雅士, 志水 元亨
腸内細菌叢が宿主の海馬における遊離アミノ酸代謝を調節する

長澤 麻央, 吉原 里江, 林 利哉
発酵乳の長期摂取がストレス条件下において誘導される脳機能障害を緩和する

丸井 萌子, 足立 華織, 小林 縁, 長澤 麻央, 林 利哉
四級アンモニウム塩型アクリルアミド高分子を用いる包括ゲル化によるモリブデン酸担持触媒調製法の開発

濱本 博三, 大岡すみれ, 松本 侑也, 三木 康義
分子内CH/ π 相互作用によるGrubbs-Hoveyda 2nd generation触媒の高活性化

小林 佑基, 五十嵐里奈, 下脇 健斗, 塩入 孝之, 松儀 真人
野生生物排泄物を用いた新規バイオモニタリングによる環境影響評価

今枝 千尋, 新妻 靖章, 大浦 健
フィブロニル系育苗箱施用殺虫剤による害虫防除の負の効果
榊原 未紗, 杉浦智多佳, 片山 好春, 日野 輝明

林 義明, 市村ひとみ, 磯部 直樹
天然資源由来のp38MAPK経路を抑制する活性分子の探索研究
—オトギリソウ科 *Garcinia* 属植物より、ピフェニル類の単離・構造決定とTNF- α 分泌抑制活性—

井藤 千裕

てんかんモデルマウス海馬のBDNF発現におけるHDAC2の役割
衣斐 大祐, 鈴木 杏奈, 石田 圭介, 間宮 隆吉, 平松 正行
SWATH法を用いたDICモデルマウスの定量プロテオーム解析

今西 進, 川原 聖也, 酒井 麻衣, 岩城圭一郎
谷 郁孝, 清水 美衣, 水野 智博, 原田 健一
リン酸化プロテオーム解析法SimSpectraSTのTripleTOFデータへの最適化

高井 彩乃, 坪坂 朋哉, 谷 郁孝, 岩城圭一郎, Veronika Suni, 今西 進
MALDI Biotyperを用いたラン藻類の分類と毒素の検出

今西 進, 赤堀 聡子, 中山 卓真, 明壁 博彦, 原田 健一
セレンおよび各種金属の細胞内取り込みにおけるアミノ酸輸送体の役割
—防御応答と毒性増強の板挟み—

植田 康次, 青木 明, 岡本 啓士典, 神野 透人
気道内膨潤性吸入粉末剤の処方検討

岡本 浩一, 奥田 知将
クロザピンおよびその主代謝物ノルクロザピンのシンブルかつ高
感度な定量分析

岡本 啓士典, 青木 明, 植田 康次, 尾崎 紀夫
吉見 陽, 野田 幸裕, 神野 透人
注射用siRNA/脂質ナノ粒子の自己組織化に適した凍結乾燥製剤の開発

奥田 知将, 岡本 浩一
神経細胞の機能異常を惹起する小胞体ストレスによる神経伝達物
質代謝調節機構の変動

加藤 美紀, 中野 樹, 朝居 祐貴, 灘井 雅行
ポリビアデイゴ(*Erythrina poeppigiana*)から単離されたイソフ
ラボン化合物erypoeigin Kのヒト白血病細胞株HL-60に対する
強いアポトーシス誘導活性

疋田 清美, 田中 齋, 村田 富保, 金田 典雄
ヒトプロテアソーム $\alpha 7$ サブユニットにより形成されるリング構
造をベースとしたタンパク質集積化法の開発

栗本 英治
テトラシアノシクロペンタジエニジビリジニウム塩「NanoGoblin」
による触媒反応

—「NanoKid」環状アセタール部位の加メタノール分解—
坂井 健男, 長尾 芳大, 中村 友紀, 森 裕二
直鎖状ポリオール的位置選択的アシル化反応

西川 泰弘, 竹本 昂平, 松田 桂奈, 田中 理沙, 原 脩

機械的粉体融合化技術による薬物球形粒の設計
—粒子の力学特性による粉砕・複合化機構の考察—

丹羽 敏幸, 近藤 啓太
漢方方剤の免疫調節作用に関わる制御性T細胞の特性解析

能勢 充彦, 柘植 厚志, 浅井紀久子, 岡本 麻莉, 日坂 真輔
アルツハイマー病モデルマウスの記憶障害におけるベタインの改善作用
衣斐 大祐, 平嶋 一貴, 角谷佳保里, 間宮 隆吉, 平松 正行
C5a受容体阻害薬は致死性血栓症を改善する。

水野 智博, 永松 正
低血清下培養により脂肪組織由来間葉系幹細胞の血液凝固作用は低下する。

水野 智博, 堀之内明日花, 永松 正
神経細胞様に分化したPC12細胞におけるアミロイド β 毒性に対
するレギュカルチンの保護効果

村田 富保
3T3L1細胞におけるレギュカルチンの脂肪分化促進効果

村田 富保

海産ポリ環状エーテル細胞毒ギムノシン-Bの合成研究

—ABCD環システムの合成—

坂井 健男, 森 裕二
皮膚創傷モデルマウスやガン細胞株に対するヒアルロニダーゼ分
解産物オリゴ糖の効果

山田 修平, 水本 秀二, 加藤 丈子, 武内 恒成, 直井 友弥
スポーツ医科学研究センター設立後3年間の活動と成果について

梅田 孝, 榎野 均, 米田 勝朗, 金子美由紀
小泉 和也, 佐々木英嗣, 中路 重之, 石橋 恭之
中1ギャップ予防を目的とする「かわりの力」育成プログラムの開発

曾山 和彦
教師視点の映像記録を活用した授業実践能力育成支援の試みⅡ

平山 勉, 後藤 明史, 谷口 正明, 竹内 英人
光合成生物の適合溶質の合成・輸送・蓄積の制御機構の解明

高倍 昭洋

◆トピックス

名城大学総合研究所創立24周年を迎えて

高倍 昭洋

総合学術研究論文集 第17号 目次

◆学術論文

1979年のスコットランド住民投票前後におけるオルタナティブ・
メディアと社会運動

—1980年代における地域主義の変化に関する歴史研究に向けて—
加藤 昌弘

YとNiを共添加したBaZrO₃の焼結性と電気伝導特性

森下 皓矢, 梶原 健寛, 池邊由美子, 坂 えり子

三次元デトネーションの数値解析

—輸送項の考慮と伝播挙動の評価—

小澤 賢翁, 菅野 望, 杉村 忠良

環境温度変化に伴うBFRPシート接着RC梁の膨張収縮挙動

岩下健太郎, 松永 秀暁, 井本 敏太, 大村 翔輝

ニワトリZP糖タンパク質のニワトリ胚由来線維芽細胞株による
一過性発現

武田 祐真, 水野 綺香, 氏田 稔, 奥村 裕紀
分子動力学法による小さいタンパク質の立体構造予測におけるシ
ミュレーション時間の検討

加藤 紘一, 仲吉 朝希, 福吉 修一, 栗本 英治, 小田 彰史
介護施設における手指衛生向上にむけた取り組み

千賀ゆかり, 二改 俊章, 古田 彩香, 小森由美子
社会心理的ストレスの繰返し負荷が脳内コルチコステロンレベ
ルに与える影響

小田 浩史, 間宮 隆吉, 棚瀬 将太, 森下 憧也, 衣斐 大祐, 平松 正行



名城大学総合研究所

〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1-501
TEL(052)832-1151 FAX(052)833-7200

総合研究所NEWS(第38号) 企画・編集

企画広報担当

平松美根男 (総合研究所所長)
平井 亮輔 (法学部) / 澤田 貴之 (経営学部)
寺田 理枝 (農学部) / 塩崎 万里 (人間学部)
田中 義人 (総合学術研究科)

学術研究支援センター 総合研究所担当

発行/平成30年10月31日